本当の創価学会を共に護りましょう

—やっぱりおかしい『教学要綱』 その3—

◆「一大秘法」は南無妙法蓮華経？

『教学要綱』は「一大秘法」を御本尊から題目に変えています。本当にこれでよいのでしょうか。

「一大秘法」とは、三大秘法を中心とするものです。三大秘法というまでもなく、「本門の本尊」「本門の題目」「本門の戒壇」です。これらはもちろん三即一、一即三の関係を成すものですが、三秘それぞれの定義を確認すれば、「本門の本尊」とは大聖人の顕された御本尊であり、「本門の題目」とはその本門の本尊を信じて唱える題目、「本門の戒壇」とは本門の本尊を受持し安置する所を指します。これだけみても「本門の本尊」が中心であることは明確です。「本門の本尊」なくして「本門の題目」も「本門の戒壇」も成り立たないからです。御本尊あつての題目であり、戒壇なのです。その意義から創価学会はこれまで「一大秘法」とは「本門の本尊」であるとしてきました。その「一大秘法」を『教学要綱』のように題目としてしまうと、対境（信ずる対象）の不明瞭な空題目（理の題目）になってしまいます。これでは全く他の日蓮宗や身延派などと同じです。身延などは「一大秘法」を題目とする故に、題目さえ唱えれば拜むのはお釈迦様でも稲荷でもよいのです。このような題目至上主義は、成仏の要である対境（御本尊）を軽視し、やがては「題目さえ唱えていけば御本尊はいらない」という考えに向かってしまうでしょう。

「それでは御本尊の無いところで唱える題目は無意味なのか？」との疑問があるかもしれませんがそれは違います。「一大秘法」を御本尊と定め、御本尊への信行の題目を前提として、自行化他に亘って唱える題目はどこにあっても御本尊に通じる題目なのです。これを戸田先生は「誦の題目」と言われました。

「一大秘法」である御本尊への信、大聖人の仏法はここから始まるということを絶対に忘れないで下さい。

次回は『教学要綱』の言う「日蓮本仏」が、実は中身のない言葉だけの「日蓮本仏」であることについてお伝えします。（つづく）

なお、ここで取り上げたことについて、詳しくは「法華経の智慧」の対談者であり元副教学部長の須田晴夫著「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」（鳥影社）および中村誠著「『創価学会教学要綱』の意味するもの」（アマゾン・ペーパーバック）をご覧ください